

# 筑波大学における聴覚障害学生支援スタッフの意識

## —参加学生へのインタビューから—

田端 毬花, 戸邊 俊哉, 片山 ふみ

### 1 はじめに

#### 1.1 研究背景

大学、短期大学、高等専門学校などの高等教育機関に在籍する障害学生数は毎年増加しており、日本学生支援機構の調査によると、平成19年度の調査では5,404人だったものが(日本学生支援機構, 2008)、平成23年度の調査では10,236人となっている(日本学生支援機構, 2012a)。学生全体に対する障害学生の在籍率は1%に満たないが、平成23年度の調査回答校数1,206校中807校が「障害学生が1人以上在籍している」と回答している(日本学生支援機構, 2012a)。こういった現状を踏まえ、これまで以上にその受け入れや修学支援体制の整備が急務であるということが、文部科学省の「特別支援教育の在り方に関する特別委員会」でも指摘されている(日本学生支援機構, 2012b)。

障害学生の修学支援には学生生活支援や就職支援のほか、授業支援というものがある。授業支援とは授業に関する支援全般を指し、たとえば視覚障害学生に対し教材の拡大やテキストデータ化、点訳を行う、あるいは聴覚障害学生に対しノートテイクやパソコンテイクを行う、肢体不自由の学生に対して専用机・イス・スペースの確保や教室内の座席配慮を行う、などがある。こういった授業支援を行っている学校は平成23年度の調査では625校あり、このうち教職員による支援を行っているのが214校、学生による支援を行っているのが235校である(日本学生支援機構, 2012a, 2012c)。過去の調査においても、学生による授業支援は教職員による授業支援と同程度、あるいはそれ以上の校数が行っているという回答があり、授業支援の担い手として学生が大きな位置を占めていることがわかる。日本学生支援機構でも、「障害学生の修学支援を支える学生(支援学生)と、その支援学生に対する支援にどのように取り組んでいくのか

(支援学生支援)は、極めて重要な課題である」(日本学生支援機構, 2007)と述べているように、支援を行う学生の存在は障害学生支援において重要な要素なのである。

## 1.2 目的

以上のような背景を踏まえ、本研究では障害学生の支援を行う学生(以下、支援スタッフという)に焦点を当て、どういった動機で障害学生支援活動に参加したのか、そして活動を継続しているのか、などの意識を探ることを目的とする。支援スタッフが支援に参加し、活動を継続している動機を探り、その意識を明らかにすることで、支援を行う立場からみた障害学生支援の姿を捉えていくことができる。

どういった学生が、どのように障害学生支援活動に携わっているのかを明らかにすることは、障害学生支援体制の整備、日本学生支援機構という支援学生支援にもつながる。それだけでなく、支援活動におけるマネジメントについても、より円滑で効果的な方法の確立に貢献できるだろう。また、本研究では障害学生支援を取り扱うが、支援を行う立場の視点を明らかにすることは、障害学生支援にとどまらず高齢者や外国人といった他の立場との関係に拡充していくことも可能である。以上より、本研究はさまざまな他者と支え合う共生社会を作り上げていく一助となることが期待できる。

## 1.3 本研究における研究対象

学生が障害学生の授業支援を行っている高等教育機関は、平成23年度の日本学生支援機構の調査では235校である(日本学生支援機構, 2012a)。在籍する障害学生の数や機関全体の規模などは幅広く、実際の支援体制もそれに合わせそれぞれの機関によって異なっている。機関そのものの特徴や支援体制によって支援スタッフが活動に参加した理由や活動を続けている理由に違いがあることが予想され、そういった背景も含めて比較検討を行うことは今回の研究だけでは難しいと考えた。そこで、学生が授業支援を行っている高等教育機関の中でもひとつの機関に絞って本研究を進めていくこととした。

障害学生の修学支援に関連する活動として、日本学生支援機構が主宰している障害学生修学支援ネットワークというものがある。このネットワークは、特に障害学生支援に積極的に取り組

んでいる大学などを拠点校に指定し、拠点校が他大学などからの相談に応じることで障害学生修学支援体制の整備や取り組みの共有化を図るものである。現在拠点校は9大学あり、そのうちのひとつに筑波大学が指定されている。障害学生支援に積極的であり、支援規模も大きいなどの背景を考慮した上で、本研究では筑波大学の障害学生支援について扱うこととする。

筑波大学は開学以来多くの障害学生が在籍し、現在は障害学生支援室が中心となって全学的な障害学生支援に取り組んでいる。授業支援に関しては、学習補助のためにピア・チューター(学習補助者)を配置するピア・チューター制度が代表的である。ピア・チューターは原則として筑波大学の学生から募集し、ピア・チューター養成講座を受講後支援活動に参加することになる。ピア・チューターに対しては、大学の規定に基づいて謝金が支払われ、一定時間以上の活動には学長名の活動証明書が発行される。支援活動は、ピア・チューターと障害学生が中心となって視覚障害・聴覚障害・運動障害と障害別に支援チームを組織して展開されている。主な支援内容は、授業準備、受講時の情報支援、授業の課題作成補助、キャンパス内の移動支援などである。2011年度には、3つの支援チーム合わせて200人を越える学生がピア・チューターとして登録している。

支援スタッフの意識を探るという研究目的に照らしてみると、3つの支援チームすべての支援スタッフについて調査を行い、それぞれを比較して明らかにする必要がある。しかし、3つの支援チームすべてのピア・チューターに調査することの難しさ、また筆者の1人であり調査にあたった田端が聴覚障害の支援チームに所属しており聴覚ピア・チューターとして活動していることなどから、聴覚の支援スタッフの意識を探ることとする。聴覚以外の支援スタッフの意識について探ること、そして比較を行うことでより深く探ることについては今後の課題とする。

日本学生支援機構などでは、支援に携わる学生のことを「支援スタッフ」あるいは「支援学生」と表現している。しかし、筑波大学の支援チームはピア・チューターと障害学生で構成されており、単に「支援スタッフ」といった場合には障害学生も含まれることになる。本研究では支援に携わる障害学生については対象外とし、以降、「支援スタッフ」はピア・チューターと同義の用語として扱う。

#### 1.4 筑波大学における聴覚障害学生支援

本研究では1.3で述べたように、筑波大学の聴覚障害学生支援に限定して研究を行う。以下では、筑波大学で行われている支援について補足的に解説を行う。

筑波大学の聴覚障害学生支援の主な活動は、聴覚障害学生が受講する講義や式典に通訳者が派遣されて行う通訳活動である。通訳活動は講義や式典の内容、チャイムの音や周りの会話など、その場の音を目に見える文字に変換して伝えるもので、このような活動を情報保障という。現在、筑波大学ではノートテイク、パソコン要約筆記、手話通訳による情報保障が行われている。

ノートテイクとは、話し言葉を手書きで文字にする支援方法のことである。数式を多く扱う理系など、パソコンや手話通訳では対応が難しい講義によく用いられる。メインの通訳者とサブの通訳者が存在し、メインの通訳者は話の内容を話し言葉のまま書き表し、サブの通訳者は講義の記録などを要約したり、テキストや資料を指し示したりする。

パソコン要約筆記は、話し言葉をパソコンに入力し、画面やスクリーンに表示する支援方法である。話し言葉の30～70%の情報を伝達することが可能であり、熟練した入力者が連携入力を行った場合、約80%の情報を伝達することが可能である。

手話通訳は、話し言葉を手話に変換して聴覚障害学生に通訳すること(聞き取り通訳)と、手話を音声に変換して聴こえる人に通訳すること(読み取り通訳)の2つを含む。筑波大学には手話通訳者が少数しかいないため、通訳も1名で行うことが多い。

#### 1.5 先行研究

高等教育機関における障害学生支援に関する研究は、障害種別に広く行われている。しかし、支援スタッフ、中でも学生の支援スタッフに関するものは、支援体制そのものの課題を論点とするものに比べるとあまり行われていない。

まず、本研究と同様聴覚障害に着目し、同様の調査方法をとる先行研究を示す。座主・打浪の研究(座主・打浪, 2009a, 2009b)は、聴覚障害学生と聴覚支援スタッフとの間にもどのような関係が築かれているかということから障害学生支援体制の現状と課題について論じるものである。これまで障害学生支援に関しては、支援の運用が課題の中心であり、現状の改

善が主に論じられてきた中で、障害学生と支援スタッフの関係性という視点から新たに支援体制の課題について指摘している。

聴覚障害学生と支援スタッフにインタビュー調査を行った結果として、両者の関係は支援する／されるだけの関係から、友人関係を築くに至っているという。しかし、ここで特に指摘されているのは、支援関係と友人関係という2つの立場を同時に抱えるゆえに、両者には葛藤が生じ、負担となっているということである。支援は現在の講義形式が前提とされ、その中で支援体制を構築していくという補完的なものであるため、障害学生は支援されることで周囲に合わせるというプレッシャーを受けることになる。また親しくなった障害学生と支援スタッフが、支援の場面における困難にうまく対処するようになったとしても、支援する／されるという関係が存在する以上、非対称的な関係であることは変わらない。現在の聴覚障害学生支援における課題は、両者の関係を重視せずに障害学生支援が進んできたことであり、両者の関係はもっと注目されるべきである、として論は締めくくられている。

座主・打浪の障害学生と支援スタッフの間に友人関係が築かれている、という知見は本研究で支援スタッフの意識を探る上でも重要なものである。友人関係と支援関係との2つの立場をあわせ持つという特徴は、比較的小規模な高等教育機関で支援を行う際の特性であるとも述べられているが、筑波大学における調査の場合でも、友人関係は築かれているのか、どのように築かれているのか、そしてその築かれ方は意識にどう影響しているのか、探る必要があるだろう。座主・打浪は障害学生と支援スタッフとの関係性に重点を置いているが、研究の中では支援スタッフが支援をどのように捉えているのか、大学から支払われる謝金についてどのように考えているのか、などについても言及されている。いずれも障害学生と支援スタッフとの関係性を捉える上で触れられているものだが、このような視点もまた、支援スタッフの意識を探る上では重要なものである。

次に、聴覚障害者支援の上位概念であるボランティアに着目し、その支援活動に参加するスタッフに着目した研究について述べる。

支援活動(ボランティア活動)とは、たとえそれが利己的であれ利他的であれ社会的であれ、「自分」でなく「他者」を援助するための行動である。この援助行動がどのような理由で行われたのか明らかにする際には、従来からその行動の「動機」に着目した分析がなされてきた(伊藤忠

弘, 2011)。この「動機」は、どういった学生がどのように障害学生支援活動に携わっているかということをも明らかにすることを目的としている本研究でも有効である。このため、本研究ではボランティア活動の動機に着目した谷田による先行研究等(谷田, 2001)を参考にして、ボランティア活動に最初に参加した動機(以降、「参加動機」とする)とボランティア活動を継続する動機(以降、「継続動機」とする)という観点から分析を行うことにした。この参加動機、継続動機という観点は、谷田の解説によれば「ボランティア活動の動機はボランティア活動を行った後では変化する」(谷田, 2001, p.84)ことを参考にしたものであり、本研究の学生がどのように支援活動に携わっているのを明らかにするのにも有効である。

「動機の変容過程に関する知見が蓄積されることが待たれる」(伊藤, 2011, p.51)という指摘にもある通り、動機研究の一助にもなると考えられる。

以上より、本研究は、聴覚障害者支援という側面では座主・打浪の知見や質問項目を参考にし、支援スタッフの側面ではボランティアに関する研究の観点を取り入れながら、より深く支援スタッフの意識に迫るという点にオリジナリティがある。

## 2 調査方法

### 2.1 質問項目

本研究では、支援スタッフの障害学生支援活動参加動機・継続動機などについて探ることを目的としている。しかし先行研究でみたボランティア活動の動機研究で見られるような単純にどういった動機が存在するのか、どの程度重視されているのか、ということだけではなく、どのような動機を持つスタッフがどのように支援活動を意識しているのかということまで掘り下げていくことで、障害学生支援に携わる支援スタッフの姿を捉え、また支援スタッフからみた障害学生支援を捉えることを目指している。そのため、調査はボランティア活動の動機分析などでよくみられるようなアンケート調査ではなく、インタビュー調査とした。

調査は、座主・打浪の先行研究から得られた「質問項目を振り返りながら補充する形で自由に語ってもらう形式」をもとに、あらかじめいくつかの質問項目を設定した半構造化インタビューを採用した。

設定した質問項目は以下の通りである。

(1) ピア・チューター活動参加以前の障害者支援・福祉等への興味

ピア・チューター活動に参加する以前から障害者支援や福祉などに興味はあったのか。また、障害者支援ということに限らず、ボランティア活動に参加したことはあるのか。

この質問を行うことで、ピア・チューター活動参加動機と、参加以前の興味関心や経験との関わりを探ることができる。

(2) 参加したきっかけ、興味をひかれた部分

ピア・チューターとして活動していくためには、ピア・チューター養成講座を受講した上で登録を行う必要がある。ピア・チューター養成講座に参加したきっかけ、養成講座受講後ピア・チューター活動に参加することを決めた要因などについて。

この項目が参加動機にあたる。

(3) ピア・チューター活動に参加することで得られる報酬

『新社会学辞典』によると、ある行為を強化し反復させるものを報酬という(森岡ほか, 1993)。報酬を得ることに成功すればするほど、あるいは得られる見込みが高ければ高いほどその行為が繰り返されるため、本研究では支援活動の継続動機を明らかにする際に用いた。

実際の質問の形としては、報酬という用語は使用せず、ピア・チューター活動に参加してよかったと思うこと、ピア・チューター活動に参加することで得られるもの、続ける理由としてどのようなものがあるか、という形をとることとする。

(4) 謝金について

学生が支援スタッフとして障害学生支援活動に参加する場合、大学側が謝金を支払うことが一般的である。先行研究の中でも謝金に対する考え方は取り上げられており、無償でも参加していた、無償であれば参加していなかった、額が高いと抵抗感がある、などの声があるという。筑波大学でも謝金制度が取り入れられているため、謝金が参加動機や継続動機にもたらす影

響について聞き取りを行う必要がある。

具体的には、謝金についてどのように考えるか、無償であったとしても参加していたか、額が現在よりも高額・低額だったとしたらどのように考えるか、など質問内容となる。

#### (5) タイピング技能について

聴覚障害学生支援の場合、パソコン要約筆記のためにタイピング技能は必須である。タイピングが得意だったのか、あるいは苦手だったのかなど、もともとの技能の程度が参加動機に影響している可能性を考え、質問項目に含めた。

具体的には、ピア・チューター活動参加以前からタイピングが得意だったのか、得意だったという場合は苦手であっても参加したのか、などの質問を行う。

## 2.2 調査対象と実施手順

調査依頼は、聴覚障害学生支援チームのチームリーダー協力のもと、聴覚ピア・チューター全員に調査協力の依頼メールを送信し、協力が得られたピア・チューターに調査を行う。また、筆者自身も聴覚ピア・チューターとして登録しているため、支援を通じて知り合ったピア・チューターにも直接メールで依頼する。

調査は聴覚ピア・チューターを中心として行い、性別、学年、学類、ピア・チューター歴などの基準は設けない。新規ピア・チューターの場合は継続動機を聞きとることが難しいことが予想されるが、参加動機についてはむしろピア・チューター歴が長いピア・チューターよりも記憶が鮮明であると考えられるため、特に限定しないこととする。

依頼メールには研究目的、調査概要について記載した。また、調査を行う直前にはより詳細な研究目的、調査概要を記載した依頼用紙を提示し、それをもとに口頭でも説明を行った。

## 3 調査結果

### 3.1 調査実施概況

調査は2012年8月から11月にかけて実施した。図表1は被調査者の概要を示したものである。



以降、被調査者は図表1に示した記号で表すものとする。また、DとHが支援を始めたばかりの新規ピア・チューターである。

被調査者	性別	学年	学類	備考
A	女	4年	知識情報・図書館	
B	男	4年	知識情報・図書館	
C	女	3年	日本語・日本文化	
D	男	1年	情報メディア創成	新規
E	女	2年	障害科学	
F	女	4年	知識情報・図書館	
G	女	3年	看護	
H	女	1年	障害科学	新規
I	女	4年	障害科学	

図表1 被調査者概要

### 3.2 質問項目ごとの回答整理

以下では、質問項目ごとに調査結果(インタビューによって得られた回答)を分類、整理していく。また、後に考察で着目する特徴的な事例や補足が必要な事例については、分類、整理後、発言の詳細を付す。

#### 3.2.1 ピア・チューター活動参加以前の障害者支援・福祉等への興味

ピア・チューター活動参加以前の障害者支援・福祉等への興味については、大学入学以前と大学入学以後で変化したケースがあったため、大学入学以前と大学入学以後に分けて考える。

##### (1) 大学入学以前の興味

以下が大学入学以前の障害者支援・福祉等への興味について分類したものである。分類項目の後にその回答となった被調査者の記号を付した。

・なかった (A, B, D)	・あった (C, E, F, G, H, I)
-----------------	-------------------------

大学入学以前、あるいは大学入学以前から興味があったという6人(C, E, F, G, H, I)の回答について詳しくみていくこととする。

C: 点字に対する興味。Cはもともと本を読むことが好きで、視力があるとき急激に落ちた際、目が見えない人はどのようにして本を読んでいるのだろうかという疑問から興味を持つようになった。興味の対象は点字、そして点訳された本にとどまり、視覚障害者のことについて意識したことはなかったという。

E, H: 幼い頃から障害者と接していた経験から、障害者支援に対して興味を持つようになった。障害に関わることを学びたいということから、障害科学類に入学している。

F: もともと本を読むことが好きだったが、小学4年生の頃、父親に買い与えられた本をきっかけに障害関連の本も読むようになった。中学生時点までは将来の夢として社会福祉士を考えていたことがあるというが、その後興味関心の方向は転換している。

G: ボランティア活動全般に意欲的であり、その一環として障害者支援にも興味を持っていた。また、高校生の頃友人が病気だったことも影響し、高校時代からは保健師を志望していることから看護学類に入学している。

I: 高校生頃からニュースなどに触れる中で、社会福祉全般に興味を持つようになった。制度としてどのようなものか、学んでみたいという興味から、障害科学類に入学している。

## (2) 大学入学以後の興味

以下が大学入学以後の障害者支援・福祉等への興味について分類したものである。

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・ なかった (A, D, F)</li><li>・ あった (B, C, E, G, H, I)</li></ul> |
|---|

大学入学以前から興味があり、関連学類に入学している4人(E, G, H, I)については、入学以前からの興味が継続しているものである。大学入学以前と変化のあった2人(B, F)について以下詳細である。

B(興味あり):大学入学後、新しいことをやりたいと考えており、新入生歓迎の時期にタダメシにひかれ福祉系サークルに加入。サークル加入をきっかけとして、福祉全般に興味を持つようになった。

F(興味なし):積極的に興味を持ち、意識していたのが中学生時点までということで、大学入学以後については意識して興味があったわけではない。

### (3) ボランティア経験

以下がボランティア経験の有無について分類したものである。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・なし (A, B, C, D, H, I)</li><li>・あり (E, F, G)</li></ul> |
|--|

ボランティア経験のない6人(A, B, C, D, H, I)の中でも、Cの場合は点訳ボランティア、Hの場合は障害者支援ボランティアに興味があったが参加する機会がなかったという。ボランティア経験のある3人(E, F, G)はいずれも障害者支援ボランティアだけでなく、さまざまなボランティアに参加したことがある。

## 3.2.2 参加動機

すでに述べている通り、ピア・チューター活動への参加は養成講座受講とピア・チューター登録の2段階が存在する。そのため、この項目では養成講座への参加動機とピア・チューター活動への参加動機にわけて記述する。

### (1) 養成講座への参加動機

以下が養成講座への参加動機(参加したきっかけ、興味をひかれた部分)について分類したものである。

- ・面白そう(A)
- ・タイピング技能が向上するという宣伝にひかれて(A)
- ・障害者支援・福祉等への興味(B, E, H, I, G)
- ・福祉に興味があった(B, I)
- ・障害者支援に携わってみたいと思っていた(E, H)
- ・ボランティア参加への意欲(G)
- ・自分にできるならやってみたい。できそうだった(C, D, I)
- ・友人に誘われて(F)
- ・自由単位(F)

A: 入学式でのスクリーン投影で聴覚障害学生支援の存在を知り、感嘆していた。その後、自らの受講している講義で障害学生支援活動に関する宣伝を受け、かっこいい、面白そうと感じ、養成講座に参加したという。また、宣伝の中で「ブラインドタッチができるようになる」と言われ、そういう点からも興味を持った。

## (2) ピア・チューター活動への参加動機

以下がピア・チューター活動への参加動機(参加したきっかけ、興味をひかれた部分)について分類したものである。

- ・使命感(A)
- ・謝金(A, F)
- ・障害者支援・福祉等への興味(B, E, H, I, G)
  - ・福祉に興味があった(B, I)
  - ・障害者支援に携わってみたい(E, H)
  - ・ボランティア参加への意欲(G)
- ・自分にできることだし、やってみたい(B, C, D, I)
- ・人間関係、居場所を求めて(D)
- ・友人が参加するため(F)

D: 大学入学以前は対人関係で積極的な方ではなかったが、対人的な面倒くさはダメージが大きいと考え、改善しようと考えていた。養成講座で優しい先輩と接し、一緒にしやすい、居心地が良さそうだと感じ、ピア・チューター活動に参加。

### 3.2.3 ピア・チューター活動に参加することで得られる報酬

報酬とはその行為を繰り返す理由づけとなるものを指す。ボランティア活動・福祉ボランティア活動に参加する学生の参加・継続動機について分析した研究である谷田(2001)や妹尾(2008)などを参考にすると、動機項目は物質的なものと精神的なものに大別できる。また、実際にインタビュー調査を行ってみると、物質的な報酬・精神的報酬のどちらにも分類し難いものが出てきたため、新たに経験的な報酬として定義し、分類することとした。

以下は、ボランティア活動の動機分析を行った研究などを参考にしつつ、独自に設定した定義である。

- ・物質的報酬：お金に代表されるような、物質的満足を得ることができるもの。
- ・精神的報酬：お金などの物質的報酬に比べ、視野が広がる、人間関係が発展するなどといった非物質的満足を得ることができるもの。ボランティアに関しては、この精神的報酬が主に指摘されている。ただし、近年はボランティアの中でも精神的報酬にとどまらず、物質的報酬を受け取る有償ボランティアも存在している。
- ・経験的報酬：精神的報酬のように、非物質的（精神的）な側面だけではなく、肉体的側面も持ち合わせているもの。たとえば、活動の参加を通して何らかの技能が身についたという場合には、経験的報酬として分類する。

報酬は以上の3分類に基づいてまとめる。

#### (1) 物質的報酬

・謝金(A, F, I)
--------------

いずれも謝金だけが報酬というわけではないが、謝金をもらえるということがピア・チューター活動を続ける後押しとなっている。

(2) 精神的報酬

- ・義務感、自己承認欲求の充足 (A, D)
- ・パソコン要約筆記の楽しさ (C, F, G, I)
- ・交流の場としての楽しさ (B, C, E, F)
- ・人間関係 (D, F, G, I)

以下、各項目についての補足である。

・義務感、自己承認欲求の充足 (A, D)

ピア・チューター活動に参加することで、社会に対する責務を果たしていると感じられ、義務感が満たされている。またその義務感が満たされることによって自己が他者に認められるという実感を持ち、自己承認欲求を満たすことができている。

Aの場合は、人の役に立っていなければ社会からはじき出されてしまうような感覚があり、人の役に立たなければならぬという義務感が存在する。ピア・チューター活動はAいわく「人の役に立てるお仕事」としてちょうどいいものであるという。また、ピア・チューター活動(人の役に立てるお仕事)の働きの対価として謝金が支払われることで、それだけの価値が自分にあると認められるように感じており、自己承認欲求が満たされている。

Dの場合、たとえば受験時代や受験勉強、大学時代は勉強や社会に出る準備など、ある一定の期間に与えられた役割を果たさなければならない、という義務感的な強迫観念があるという。また浪人経験から、親から承認されていないという感覚も存在したため、ピア・チューター活動により義務感が満たされ、それなりに社会の役に立つ仕事をする事で親からも承認されるように感じている。

・パソコン要約筆記の楽しさ (C, F, G, I)

聴覚障害学生支援の支援方法のひとつであるパソコン要約筆記自体に楽しさを見出している。

・交流の場としての楽しさ (B, C, E, F)

障害学生や支援スタッフなど、ピア・チューター活動に携わる上で関わるさまざまな人と接することを楽しみを見出している。ただしこの分類では、私的な付き合いや友人関係を築いているわけではなく、あくまで交流の範囲内での接触にとどまるものを指す。

・人間関係(D, F, G, I)

前述の「交流の場としての楽しさ」よりも、より私的な付き合いを行い、人間関係を拡充している。ただしFは私的な付き合いがないわけではないが、実際に親しい友人関係を築いているということではなく、「友達感覚」や「チームの一員という感覚」があるということを行っている。

(3) 経験的報酬

- ・タイピング技能(A, H)
- ・障害者理解。将来の役に立つ(E, G, H)
- ・ちょっとした知識を得ることができる(B, C, E, F)

・タイピング技能(A, H)

ピア・チューター活動に参加することを通して、タイピング技能が上がったと意識している。タイピング技能の上昇は具体的には、ブラインドタッチができるようになった、タイピングスピードが速くなった、などを指す。

・障害者理解。将来の役に立つ(E, G, H)

障害学生と接することで障害者理解につながっていると意識している。将来的に障害者と関わりのある職を検討しており、将来のためにも良い経験として捉えている。

・ちょっとした知識を得ることができる(B, C, E, F)

障害学生の受講する講義の場に同席することで、講義内容を理解するといふほどでなくともどういった講義なのかという大まかな知識を得ることができる。B, C, Eは講義を聞くことで得られる知識について言及しているが、Fの場合は障害学生との会話によって得られる知識についても言及している。具体的には、講義の担当教員のとなりや、障害学生の専門分野に関する知識などである。

### 3.2.4 謝金について

謝金に関しては、無償であったとしても参加していたか、額が現在よりも高額・低額だったとしたらどのように考えるかという質問内容のため、それぞれについて分類する。

(1) 謝金について

- ・お金をもらう以上、遅刻をしない、それなりの働きをする、責任を持って行う(A, B, C, D, E, F, G, H, I)

(2) 無償であったとしても参加していたか

- ・無償ならば参加していなかった(A, F)
- ・多少意識は変わったかもしれないが、無償でも参加していた(B, C, D, E, G, H)

(3) 額が現在よりも高額だったとしたらどのように考えるか

- ・嬉しい(B, C, D)
- ・責任が重い(A, E, F, G, H, I)

(4) 額が現在よりも低額だったとしたらどのように考えるか

- ・少し考える。躊躇する(A, F)
- ・気にしない(B, C, D, E, G, H, I)

### 3.2.5 タイピング技能について

(1) ピア・チューター参加時点でのタイピング技能

- ・得意(C, D, I)
- ・もともとそれなりにできたが速くはない(G)
- ・得意ではないが、それなり(B, E)
- ・苦手ではない(F)
- ・苦手(A, H)

(2) もしタイピングが苦手でもピア・チューター活動に参加していたか

実際の回答においては表現に違いがあるが、タイピングが苦手ではなかったという回答にあたる7人(B, C, D, E, F, G, I)について分類する。



・参加していた (E, G)  
 ・参加していなかったかもしれない (B, C, D, F, I)

#### 4 考察

以下では、前述の調査結果をもとにして支援スタッフの参加動機、継続動機、ピア・チューター活動に対する意識について考察する。図表2は、被調査者それぞれの各質問への回答をまとめたものである。

被調査者	障害者支援への興味		ボランティア 経験	参加動機		継続動機			謝金				タイピングについて	
	入学以前	入学以降		養成講座への参加	ピアチューターへの参加	物質的報酬	精神的報酬	経験的報酬	概略	無償の場合	高額の場合	低額の場合	参加時点の技能	苦手でも参加したか
A	×	×	×	タイピング技能向上	使命感 謝礼	謝礼	義務感、自己承認欲求	タイピング	責任発生	参加しない	責任が重い	躊躇	苦手	/
B	×	○	×	福祉への興味 やってみたい	福祉への興味 やってみたい		交流の楽しさ	知識	責任発生	参加	うれしい	気にしない	それなり	しなかったかも
C	○	○	×	やってみたい	やってみたい		PC要約筆記の楽しさ 交流の楽しさ	知識	責任発生	参加	うれしい	気にしない	得意	しなかったかも
D	×	×	×	やってみたい	やってみたい 居場所を求め		義務感、自己承認欲求 人間関係		責任発生	参加	うれしい	気にしない	得意	しなかったかも
E	○	○	○	障害者支援への携わり	障害者支援への携わり		交流の楽しさ	障害者理解知識 将来に役立つ	責任発生	参加	責任が重い	気にしない	それなり	参加した
F	○	×	○	やってみたい	やってみたい	謝礼	PC要約筆記の楽しさ 交流の楽しさ 人間関係	知識	責任発生	参加しない	責任が重い	躊躇	苦手ではない	しなかったかも
G	○	○	○	友人からの誘い	謝礼 友人からの誘い		PC要約筆記の楽しさ 人間関係	障害者理解 将来に役立つ	責任発生	参加	責任が重い	気にしない	速くはない	参加した
H	○	○	×	ボランティアへの参加	ボランティア参加			タイピング 障害者理解 将来に役立つ	責任発生	参加	責任が重い	気にしない	苦手	/
I	○	○	×	福祉への興味 やってみたい	福祉への興味 やってみたい	謝礼	PC要約筆記の楽しさ 人間関係		責任発生	参加	責任が重い	気にしない	得意	しなかったかも

○・・・あり、×・・・なし

図表2 被調査者ごとの回答結果

参加動機は、それまでの障害者支援や福祉等への興味やタイピング技能がどのように影響しているのか考察する。

継続動機は、それまでの障害者支援や福祉等への興味や参加動機、謝金に対する考え方、タイピング技能、またインタビュー調査の中で語られ、読み解くことができたパーソナリティの影響から考察する。

ピア・チューター活動に対する捉え方・意識については、インタビュー調査の中で語られた内容をもとに類型化し、その捉え方・意識と参加動機や継続動機などとの関連について述べていく。

#### 4.1 参加動機

参加動機(該当質問項目:参加したきっかけ、興味をひかれた部分)に関連する質問項目は以下の通りである。これらの項目によって参加動機がどのように異なるのかについて考察していく。

- ・ピア・チューター活動参加以前の障害者支援・福祉等への興味
- ・タイピング技能について

まず、ピア・チューター活動参加以前の障害者支援・福祉等への興味である。大学入学以後、障害者支援や福祉全般に対して興味を持っていたという場合、その興味に基づいてピア・チューター活動に参加している(B, E, H, I, G)。しかし福祉に関わることに興味を持っていたとしても、Cの点字への興味のように、聴覚障害学生支援と直接関わりのない分野への興味だった場合には参加動機にはならない。また、かつて障害者支援に対して強い興味を持っていたとしても、大学入学以後もその興味が持続していない場合には、友人の誘いや自由単位など、障害学生支援活動と直結した参加動機ではない(F)。

今回調査した中では、障害者支援や福祉に対して興味を持っていたというケースの方が多いが、大学入学以前以後を通してそういった興味を持っていなかったケースも存在する(A, D)。Aの場合、ピア・チューター活動の宣伝などを受け「面白そう」という動機で養成講座に参加し、「使命感」からピア・チューター活動に参加している。Aの使命感は3.2.3の(2)精神的報酬「義務感、自己承認欲求の充足」で述べたように、たとえばボランティアなどの形で人の役に立ちたいという具体的な使命感ではなく、「人の役に立たなければならない」という、より抽象的な使命感である。Dの場合は、「自分にできるならやってみたい。できそうだった」ことから養成講座へ参加し、「自分にできることだし、やってみたい」「人間関係、居場所を求めて」ピア・チューター活動に参加してい

る。参加以前に特別の興味を持っていなくともAのように使命感に駆られる場合もあり、Dのように人間関係を求めて参加する場合もあるということである。

また、ボランティア経験があったのはE, F, Gの3人であり、その他はボランティア経験なしである。このことから、ボランティア活動などに積極的ではなかったとしてもピア・チューター活動には参加し得るということがわかる。

障害者支援や福祉等への興味が参加動機に影響する部分も多々あるが、「自分にできることだし、やってみたい」など、障害者支援という側面以外の要素も参加動機に含まれている。この「自分にできることだし、やってみたい」という参加動機をもって参加したのはB, C, D, Iだが、この4人はもしタイピングが苦手であれば参加していなかったかもしれないと答えている。さらに、自由単位や友人の存在が参加動機であるFも、もしタイピングが苦手であれば参加していなかったであろうという。こういったことから、今現在の自分にできることだからこそ参加する＝もしそのための技能がなければ参加しない、という図式が成り立ち、聴覚障害学生支援においてはタイピング技能がその技能にあたると思われる。聴覚障害学生支援ではなく、視覚や運動など他の障害学生支援の場合はまた異なった技能がここにあてはまることも考えられるが、「自分にできることだから」という参加動機はどういった場合にも存在するのではないだろうか。

その一方でタイピング技能が苦手である、あるいは苦手だったとしても参加していただろうというケースも存在する(A, E, G, H)。この4人の中では、A, Hはもともとタイピングが苦手、E, Gはそれなりにできたという。Aは養成講座への参加動機として「タイピング技能が向上するという宣伝」をあげており、参加する目的のひとつとして技能向上が存在するため、技能の低さは問題とならない。E, G, Hに関しては、ピア・チューター活動参加に対する意欲が他者よりも高かったのではないかと推測できる。E, Hは大学入学以前から障害者支援に対して興味があり、障害者支援に携わってみたいと考えていたため、技能の低さを度外視しても参加する動機が存在する。またGは大学入学以前からボランティア活動に積極的に参加しており、ピア・チューター活動もボランティアの一種として捉え、参加している。福祉に対する興味があったという点ではB, IもE, G, Hと同じだが、B, Iは障害者支援に限定した興味ではなく福祉全般に対する興味である。福祉全般に対する興味ということは、参加するものは障害学生支援でなくても構わないということであり、技能の低さをおしてでも参加しなければならないわけではない。また、E, Hの参加動機は「障害者支援に携わってみた

い」、Gは「ボランティア参加への意欲」であり、B、Iの「福祉に興味があった」というものよりも参加に対する意欲が強いと考えることができる。こういった違いからタイピング技能が与える参加への影響が異なっていると考えられる。

## 4.2 継続動機

継続動機(該当質問項目:支援を行うことによる報酬)に関連する質問項目は以下の通りだが、これらの質問項目以外にも調査の中で語られたパーソナリティも含め、継続動機がどのように異なるのかについて考察していく。

- ・ピア・チューター活動参加以前の障害者支援・福祉等への興味
- ・参加したきっかけ、興味をひかれた部分(参加動機)
- ・謝金について
- ・タイピング技能について

### 4.2.1 物質的報酬

・謝金(A, F, I)

A, Fは参加動機に「謝金ももらえること」をあげているため、無償でも参加していたというB, C, D, E, G, H, Iとは異なり、謝金の存在が報酬としても意識されている。

Iは参加動機に謝金は意識されておらず、その点では謝金を報酬としないB, C, D, E, G, Hと同様である。しかし、Iは支援の労力を考えると楽しさだけでは続かない、続けていく上で謝金は必要であると考えている。聴覚障害学生が講義に参加するために支援は必要であり、100%の支援を求めるといった権利意識の強い障害学生もいるため、障害学生の権利を保障する、情報保障する責任は重いという。障害学生の権利意識、情報保障における責任の重さにまで言及しているのはIだけである。他の8人がそういった考えを持っている可能性は否定できないが、インタビュー調査の中で言及するほど意識しているのはIだけであると考えられる。Iがこういった考えを持つ要因として、Iが支援チームの中核に位置していたことがあり、他のピア・チューターよりも障害学生と深く接する機会が多かったということが考えられる。Iによると、「聴覚障害のある人は、直接はあんまり言わなくても、メールとかだと強く出てきたりする」「仲良くなってから言ってくれたりもある」ということ

があるため、障害学生と親しい関係になり、障害学生からの要望を知るようになったことで支援を行う責任や求められる質について重く受け止めるようになったのだろう。

#### 4.2.2 精神的報酬

##### ・義務感、自己承認欲求の充足(A, D)

A, Dには何らかの役割を果たさなければならないという義務感、さらには自己が承認されていないという感覚が存在するためこういった報酬が存在する。A, D以外の被調査者に関しては、今回のインタビュー調査の中ではそういった意識の存在は明らかにならなかった。少なくとも意識的な部分ではAやDのような義務感や自己承認欲求を持ってピア・チューター活動に臨んでいないということになる。

##### ・パソコン要約筆記の楽しさ(C, F, G, I)

今回の調査の中ではこの報酬に至る(至らない)要因は明らかにならなかった。

##### ・交流の場としての楽しさ(B, C, E, F)

##### ・人間関係(D, F, G, I)

新規ピア・チューターであり、交流の機会がまだそれほどないHを例外とするならば、A以外は人との関わりに何らかの報酬を見出している。DもHと同様新規ピア・チューターだが、Dの場合は人間関係が参加動機に含まれている。また、実際には忙しくて参加できていないという場合もあるが、新規ピア・チューター含め、A以外は交流会の参加にも意欲的である。

Aは、交流会や障害学生らと交流することに対して「誰にもそんなにメリットがない。人のつながりはあるかもしれないけれど、はっきりした形にはならない」と述べている。Aは形として残せるものに価値を置いており、支援活動を行うことで文字情報が増える、養成講座に参加し指導を行うことでピア・チューターが増える、など「なかったものがあるようになることが好き」なのだという。

Aのような考えを持ち、交流に消極的な場合もあるが、参加動機や過去の興味関心・経験などの差異に関わりなく、多くはピア・チューター活動に関わる人々との関わりを楽しみ、報酬として捉えらるると考えられる。

#### 4.2.3 経験的報酬

##### ・タイピング技能(A, H)

ピア・チューター活動参加時点で、タイピングに対して苦手意識を持っていた場合にタイピング技能を報酬として捉える。A, Hの他は得意意識を持つ場合(C, D, I)と、得意とまでは言わないが苦手意識はないという場合(B, E, F, G)であり、もともと苦手であったというA, Hの方がより顕著にタイピング技能の向上を意識するのだろう。

##### ・障害者理解。将来の役に立つ(E, G, H)

大学卒業後の希望進路が障害者と関わりのあるものである場合にこの報酬となる。

E, Hは大学入学時から障害者支援に興味があり、大学卒業後も障害者支援に関わることを希望している。学類も障害科学類を選択しており、参加動機も「障害者支援に携わってみたい」というものである。

Gは障害者支援ではなく保健師志望の看護学類だが、障害者との関わりがあることを意識している。またGの参加動機は「ボランティア参加への意欲」であり、その意欲自体将来とつながっているとも考えられる。

大学卒業後の希望進路との関わりでいえばIも障害科学類在籍であり、福祉に関わる職を考えている。障害者理解に役立っていないとはいえないが、特に障害者理解という報酬をあげているわけではない。E, H、あるいはGとの違いは、Iは精神的報酬として「人間関係」とあげており、Iにとって障害学生支援の場は他では得られない居場所であり、よりどころとする人間関係の場であるということである。I自身、人間関係に依存するタイプであると語っており、ピア・チューターを続けている一番の理由は人間関係であるという。たとえ将来と関わりがあったとしても、それ以上に重視する報酬がIには存在するのである。それに対してE, G, Hは将来的に役立つものだからこそ参加しているため、報酬として意識されている。

そして、障害学生支援活動と大学卒業後の希望進路との関わりがより薄い場合(A, B, C, D, F)にも、E, G, Hのように報酬として意識されないといえる。

・ちょっとした知識を得ることができる(B, C, E, F)

B, C, E, Fは精神的報酬「交流の場としての楽しさ」とも重なる。

支援の場で重要な人間関係を築いている(D, G, I)、あるいは義務感、自己承認欲求を充足する場として捉えている(A, D)場合には、講義を通して得られる知識は報酬としての重要度がより低いのではないかと考えられる。支援の場を、交流することもできる場として捉えているからこそ、交流の場で得られる経験のひとつとして知識が存在するのである。

### 4.3 ピア・チューター活動に対する意識

ピア・チューター活動は大学から謝金が支払われる活動である。謝金によって生じる責任感、すなわち「お金をもらう以上、遅刻をしない、それなりの働きをする、責任を持って行う」という回答は全員から得られている。被調査者が調査に協力してくれる、メール依頼に答えてくれるような人物という時点である程度のバイアスがかかっていることは否定できないが、多くは支援を行うことの責任を意識していると考えられる。

これまで考察してきた通り、障害学生支援に参加するのは障害者支援や福祉に興味がある人だけではなく、自らの技能がいかせること、面白そう、自由単位の取得など、「障害学生支援に携わりたい」という参加動機以外の人も存在する。障害学生支援に携わることが主目的でない支援スタッフは、障害学生支援をどのように捉えているのかという観点から、以下のように分類することができる。

- ・障害学生支援(E, H)
- ・仕事(A, D)
- ・最初は仕事意識が強かったが、人間関係を築いたことで楽しさの方が強くなった(F, I)
- ・楽しいもの(B, C)
- ・ボランティアのようなもの(G)

それぞれの分類がどのようなものなのか、どのような参加動機や継続動機によってわかれているのかということについて以下では述べていくこととする。

・障害学生支援(E, H)

障害学生を支援している、ということの特を意識している。

E, Hともに大学入学以前から障害者支援に対して興味があり、障害者支援に携わってみたいという参加動機でピア・チューター活動に参加している。学類の選択も障害者支援に対する興味からであり、ピア・チューター活動は障害者支援のひとつとして参加するものと捉えている。継続動機には「障害者理解」もあり、将来希望する進路も見据えた上で携わっている。そのため、謝金の有無や額についても参加には影響せず、タイピング技能が低かったとしても参加していただろうという。

ピア・チューター活動を障害学生支援として意識しているのは障害者支援に対する意欲や将来的関わりを持つE, Hのみである。こういったことから、E, Hのような動機や興味関心を持たない限り、ピア・チューター活動は障害学生支援ではなく、仕事や自らが楽しむものなどとして意識されると推測できる。

#### ・仕事(A, D)

ピア・チューター活動を人あるいは社会の役に立つ仕事として捉え、その働きの対価として謝金を意識している。この場合の謝金は、謝礼としてのお金ではなく、労働の対価として捉えられており、ピア・チューター活動を「仕事」として捉えていると表現することができる。

A, Dともに精神的報酬「義務感、自己承認欲求の充足」をあげており、A, Dにとってこの義務感や自己承認欲求は社会や人の役に立つ仕事をこなすことで満たされるものである。それは、単に社会や人の役に立つという実感だけではなく、仕事の対価に支払われるお金も不可欠な要素となっている。ピア・チューター活動を仕事として捉えているからこそ「義務感、自己承認欲求の充足」という報酬が存在するともいえる。

AとDでは、Aのみが参加動機に「謝金」をあげている。このことから、Aはピア・チューター活動参加当初から仕事として意識しており、Dはピア・チューター参加後から仕事として意識するようになったといえる。

#### ・最初は仕事意識が強かったが、人間関係を築いたことで楽しさの方が強くなった(F, I)

ピア・チューター活動は責任を持って果たすべきことであり、働きに相応の対価として謝金をもらうべきだという仕事意識が前提として存在する。その上で、ピア・チューター活動を通して人間関係



を築いた結果、単なる仕事として捉えるのではなく、人間関係によって得られる自らの楽しさをより強く意識している。

F, Iの場合はA, Dと異なり、義務感や自己承認欲求については意識的に言及していないため、A, Dとは異なる理由から仕事として捉えていると考えられる。

Fの場合、参加動機が「友人が参加するため」と「お金もらえる」というものである。過去に障害者支援や福祉などに興味があったことの影響がなかったわけではないが、当初は自発的・積極的に参加するほどの意欲はなかった。そのため、ピア・チューター活動によってお金が得られるということ意識し、仕事という捉え方が先立っただろう。仕事という意識が存在することで、謝金に関しては働きに応じた額を望んでいる。Fいわく、謝金のもともとの目的は利用者が要望を伝えやすくするためであり、もし謝金の額が現在よりも高額だったとしたら、今はそこまで要望を伝えてもらっているわけではないため、あまり適切ではないという。

Iの場合はもともと福祉に興味があり、自分にできることだからやってみたい、という参加動機である。謝金の存在は参加動機ではなく継続動機として意識されており、実際にピア・チューター活動に携わってみると、支援の労力と障害学生の情報保障という責任は大きく、重いものであり、謝金がなくてはなかなか続けられないという。単に情報保障の責任が重いため、謝金がなければ続けられないといった場合は謝礼としてのお金という意味合いが強い。しかし、支援の労力についても言及しており、さらには1人で支援に入る場合と2人で支援に入る場合では労力にかなりの差があるにもかかわらず、謝金が時給で支払われるため、もう少しもらってもいいのではないかと思うこともあるという。また、謝金が現在の額よりも高額になった場合については、集中力が続かないなど支援自体にむらがあると自分自身が感じているため、あまり高額になるとそこまで責任を負えないという。このように、労力や働きに相応の謝金を求めていることから、Iもまた仕事として意識している部分が存在する。Iの仕事意識は支援の責任の重さから生じている。支援の責任の重さを意識する要因は、すでに4.2.1物質的報酬「謝金」で考察したように、障害学生の権利意識を知る関係の中にいたことが考えられる。

以上のような要因からF, Iはピア・チューター活動を仕事として捉えているが、継続動機 精神的報酬「人間関係」により、自らの楽しさを意識している。ピア・チューター活動を仕事として捉え、継続動機に「人間関係」が存在するという点ではDも同様だが、Dには「義務感、自己承認欲求の充

足」という報酬も存在する。「義務感、自己承認欲求の充足」のためにはピア・チューター活動を仕事として捉える必要があり、ピア・チューター活動が仕事でなければならない理由がDには存在するのである。

・楽しいもの (B, C)

謝金は、もらえたら嬉しいというだけのものであり、ピア・チューター活動を仕事として意識していない。また、支援をしているという意識はなく、やっていることが結果として貢献できている、ということから、前述のE, Hのように障害学生支援とも異なる。ピア・チューター活動の場での交流の楽しさやちょっとした知識を得られる楽しさ、パソコン要約筆記自体の楽しさなど、責任感を持って取り組んではいるが、とにかく楽しいという。

B, Cの参加動機は「福祉に興味があった(B)」「自分にできるならやってみたい(B, C)」であり、継続動機、すなわち得ている報酬は「パソコン要約筆記の楽しさ(C)」「交流の場としての楽しさ(B, C)」「ちょっとした知識を得ることができる(B, C)」である。義務感や自己承認欲求から仕事として捉えるというわけでもなく、障害者支援に対する興味が強いわけでも、将来的に関わりがあるわけでもない。B, Cはタイピング技能がもし低かったならば参加していなかっただろうとも言っており、支援に携わることを重く受け止める要因がなかった、とも考えられる。

・ボランティアのようなもの (G)

それぞれの分類は被調査者の発言に基づいて分類を行い、発言上の違いがあれば別のものとして扱っている。そのため、「ボランティア」と「障害学生支援」という捉え方の内実に大きな違いがなかったとしても、これらは別の分類としている。

参加動機が「ボランティア参加への意欲」である。養成講座への参加を決める時点でピア・チューター活動をボランティア活動の一種として捉えているため、その後も仕事などといった捉え方がされなかったと考えられる。

また、仕事として捉えない要因として、Gはピア・チューター活動だけでなく何事にも負担を感じないようバランスを取っている。支援に入ることに関してはプレッシャーに感じたら断り、謝金についても、責任感とのバランスが難しいが、ちゃんとやらなければならないというプレッシャーがむしろ

る負担に感じるという。ピア・チューター活動とバイトや勉強など他の活動との兼ね合いに関しても、特にどれかを優先させ、頑張っているわけではなく、そこそこなしていると語っている。このように負担感を回避するパーソナリティはもともとのものということもあるが、大学入学後、それまで感じていたプレッシャーから解放されたと感じていることも影響しているだろう。Gは高校時代まで成績がトップクラスであり、親も教育に厳しい親だったという。「あの子は頭が良い」という目で常にみられ、成績が落ちると親から口出しをされる、そういったプレッシャーが高校時代までは存在したが、大学に入学したことで楽になった、良かった、と語る。それまで常に存在していたプレッシャーから解放されたことで、負担に感じることを回避したいという意識が働いていると考えることもできる。

## 5 おわりに

本研究はここまで、聴覚支援スタッフに対するインタビュー調査にもとづいて、障害学生支援活動への参加動機や継続動機、支援に対する意識について分析を行ってきた。

参加動機には福祉への興味とタイピング技能が特に影響しており、タイピング技能が参加を決定づける要因として、ときには福祉への興味よりも強く影響するということが明らかになった。たとえ福祉への興味がなかったとしても、自らの技能を活かせる、自分にできることであるということが参加の端緒となるのである。

継続動機には物質的報酬、精神的報酬、経験的報酬の概ね3種類の報酬が存在する。その一例として、参加動機が「謝金」の場合は物質的報酬の中でも「謝金」が報酬となり、また参加動機が「障害者支援への興味」の場合は経験的報酬の中でも「障害者理解」が報酬となっている。このように、参加動機やもともとの福祉への興味などから、活動の継続を決定づける要因は異なってくることがわかった。

支援スタッフが支援活動をどのように捉えているのか、支援に対する意識について分類すると、「障害学生支援」「仕事」「最初は仕事意識が強かったが、人間関係を築いたことで楽しさの方が強くなった」「楽しいもの」「ボランティアのようなもの」といった捉え方が存在する。これらの捉え方の差異は参加動機や継続動機によって現れており、参加動機や継続動機によっては「障害学生支援」という一面的な捉え方だけではないことが明らかになった。

座主らの先行研究では、友人関係と支援する／される関係の両方が存在することとその問題について指摘していた。しかし、継続動機に「人間関係」をあげていない支援スタッフの存在などから、筑波大学の障害学生支援活動においては、障害学生との友人関係は必ずしも築かれていない。また、支援に対する意識からは、支援する／されるという関係をそれほど強く意識せず、「楽しいもの」と捉えているケースもみられた。これらの違いは、支援規模の差が現れている可能性がある。先行研究では支援規模が小さい支援体制の特性であると言いついており、筑波大学は障害学生、支援スタッフの人数も多く、支援を「仕事」と捉える支援スタッフも存在するように、支援体制が整備されている。今回の調査で明らかになった結果が、障害学生支援を積極的に行っている高等教育機関の特徴である、と断言することはできないが、本研究で明らかになった参加動機や継続動機、支援に対する意識からは、多様な参加の仕方が存在することが示唆されている。

福祉への興味があったわけではない、あるいは、支援活動を仕事や楽しいものとして捉えている支援スタッフの存在から、「障害学生を支援する」という特別な意識を持たず、学生生活の延長上にある支援活動の姿がみられる。こういった支援スタッフの意識を踏まえた支援体制作りを行っていく必要があるだろう。

## 謝辞

この研究を形にすることが出来たのは、貴重な時間を割いて調査に協力してくださったA氏、B氏、C氏、D氏、E氏、F氏、G氏、H氏、I氏のおかげです。皆様に心から感謝いたします。

## 引用文献・参考文献

有海順子, 四日市章. 大学での授業形態の違いと聴覚障害学生への情報保障. 聴覚言語障害.

2006, vol.35, no.2, p.79-87.

浦部奈津美, 岩田吉生. 日本の高等教育機関における聴覚障害学生の受け入れ状況の現状と課題. 障害者教育・福祉学研究. 2011, vol.7, p.17-24.

碓井真史. ボランティア活動への動機に及ぼす報酬の効果. 道都大学紀要. 社会福祉学部. 1995, vol.18, p.1-11.

- 大泉溥. 特集, 大学における特別な教育的ニーズへの対応:わが国における障害学生問題の歴史と課題. 障害者問題研究. 2007, vol.35, no.1, p.2-10.
- 小田利勝. 社会調査法の基礎. プレアデス出版, 2009, 234p.
- 鳥山由子. 特集, 大学における障害学生への支援:共生の時代を担う人材育成をめざして:筑波大学の障害学生支援プログラム . リハビリテーション研究. 2005, no.122, p.7-11.
- 古賀文子. 高等教育における情報保障の問題点 : 奈良女子大学のノートテイク実践を例に. 人間文化研究科年報. 2007, vol.22, p.245-255.
- 座主果林, 打波(古賀) 文子. 聴覚障害学生とノートテイクの関係の変化 -- 高等教育における情報保障の現状と課題. 奈良女子大学社会学論集. 2009a, vol.16, p.165-180.
- 座主果林, 打浪(古賀) 文子. 高等教育のユニバーサルデザイン化における課題 : 奈良女子大学の聴覚障害学生へのインタビュー調査から. 人間文化研究科年報. 2009b, vol.24, p.115-126.
- 妹尾香織. 若者におけるボランティア活動とその経験効果. 花園大学社会福祉学部研究紀要. 2008, vol.16, p.35-42.
- 日本学生支援機構. “障害学生修学支援担当者のための事例解説”. 日本学生支援機構. 2007. [http://www.jasso.go.jp/tokubetsu\\_shien/documents/jireikaisetu\\_001.pdf](http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/documents/jireikaisetu_001.pdf), (参照 2013-2-7).
- 文部科学省. “平成19年度(2007年度) 大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書”. 日本学生支援機構. 2008. [http://www.jasso.go.jp/tokubetsu\\_shien/documents/20080620houkokusyo.pdf](http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/documents/20080620houkokusyo.pdf), (参照 2013-2-7).
- 文部科学省. “平成23年度(2011年度) 大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書”. 日本学生支援機構. 2012a. [http://www.jasso.go.jp/tokubetsu\\_shien/documents/report\\_h23.pdf](http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/documents/report_h23.pdf), (参照 2013-2-7).
- 文部科学省. “障がいのある学生の修学支援に関する検討会関連資料”. 文部科学省. 2012 b. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321931.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321931.htm), (参照 2013-2-7).

文部科学省. “特別支援教育の在り方に関する特別委員会(第19回) : 配付資料”. 文部科学省.

2012c. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/siryo/1321664.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/siryo/1321664.htm), (参照  
2013-3-26).

谷田勇人. 福祉ボランティア活動をする大学生の動機分析. 社会福祉学. 2001, vol.41, no.2,  
p.83-94.

伊藤忠弘. ボランティア活動の動機の検討. 学習院大学文学部研究年報. 2011, vol.58, p.35-55.